



# 赤穂城下町跡発掘調査現地説明会資料

平成26年3月8日(土) 午前10時30分～  
赤穂市教育委員会

No. 1

## 1 調査の経緯

今回の発掘調査は、赤穂あけぼの幼稚園の建替えに伴う発掘調査です。発掘調査は、今回の工事範囲の遺跡の記録保存のために、約450㎡について実施しています。

## 2 調査地の歴史

現在の赤穂市街地の中心部は、古代から中世にかけては海や干潟のような環境で、人が住める土地ではありませんでした。人が住めるようになるのは、千種川が運んできた土砂によって陸地が広がってきた約600年前のことで、このころには「加里屋古城」とよばれる砦が築かれ、北側の山麓から人々が加里屋周辺に移住してきたことが記録に残っています。しかし、この頃の生活の痕跡が発掘調査でみつかったことはなく、その様子はよくわかりません。

調査地に確実に人が住み始めたことがわかるのは江戸時代になってからのことです。

池田家が赤穂を治めていた江戸時代初め（約400年前）の絵図（絵図1）をみるとすでに2軒の侍屋敷があったようで、赤穂城下町跡ではかなり早くに作られた侍屋敷のひとつでした。

浅野家が赤穂を治めていた江戸時代前期（約350年前）の絵図では、4軒の侍屋敷があります（絵図2）。他の絵図からは、江戸時代中期（約290年前）にも侍屋敷があったことがわかります。

森家が赤穂を治めていた江戸時代後期（約280年前）には「天神宮」という神社へと変わり、侍屋敷は無くなっています（絵図3・4）。この「天神宮」とは菅原道真（天神さん）を祀る神社で、明治時代まで現在地にありました。しかし、明治42（1909）年、赤穂城塩屋門の西側にあった「赤穂神社」に合祀されることとなり、現在地には「赤穂神社」が移転してきます。この「赤穂神社」も昭和24（1949）年には「大石神社」に合祀され、現在は赤穂大石神社になっています。

現在地に残された「赤穂神社」の土地と建物の一部はカトリック教会の所有となり、赤穂カトリック教会が建設されることになりました。このとき、残されていた「赤穂神社」の社殿の一部が増改築され、教会の聖堂となり、最近まで使用されていました。

No. 2



< 絵図1 >

江戸時代初めの調査区周辺  
(池田氏時代・17世紀初め)

侍屋敷  
「辻部半左衛門 十二間式尺十二間」  
「廿五石 嶋井九兵衛 十一間十一間」



< 絵図2 >

江戸時代前期の調査区周辺  
(浅野氏時代・17世紀後半)

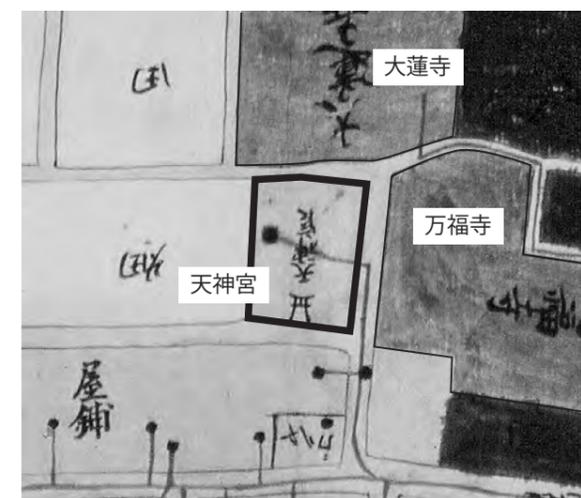
侍屋敷  
「依田三左衛門」 (百石)  
「三春武平」 (米二十石)  
「林藤兵」  
「大久保十蔵」 (百石)  
※( )内は『浅野家分限帳』記載の石高



< 絵図3 >

江戸時代後期の調査区周辺  
(森氏時代・18世紀末)

「天神宮」



< 絵図4 >

江戸時代後期の調査区周辺の上水道  
(森氏時代・18世紀末)

「天神宮」

### 3 発掘調査の成果

発掘調査では、昔の地面が大きく分けて上層と下層の2面、見つかりました。

上層は江戸時代後期から明治時代までの地面で、「天神宮」の跡が見つかりました。

具体的には、約150年前(幕末～明治時代初め)に作られた上水道、地面をたたきしめた土間、建物の礎石などがみつっています。

上水道は素焼土管をつなげたもので、大部分は幕末～明治時代初めに作られたものです。素焼土管に混じて瓦管が使われている部分があることから、江戸時代後期に作られた上水道を改修しながら明治時代まで使用していたといえます。また、江戸時代後期の絵図に描かれた上水道と、みつかった上水道の位置と方向が完全に合致している(絵図4)ことから、江戸時代後期にはすでにこの場所に上水道があったといえます。

上水道はこの場所に人の生活する住居があったことを示していますが、神社の敷地内に普通の民家が建っているのは考えにくいことです。文献によれば「天神宮」には社務所があり、宮司もいたことが記録されており、今回みつかった建物は、宮司の暮らす社務所であったといえそうです。

この建物の北側には一部ですが礎石が見つかり、その上に瓦や壁土、漆喰が大量に捨てられた場所がありました。この場所には上水道が通っていないことや、出土した瓦の年代から、調査区北側には「天神宮」の社殿があったと思われます。調査では天満宮の神紋である「梅鉢文」をあらった鬼瓦なども出土しており、「天満宮」の痕跡を多くみつけることができました。

以上の成果から、調査地には絵図や文献に残されている「天満宮」が江戸時代後期から存在し、敷地北側に社殿、西側に宮司の暮らす社務所が存在したことが分かりました。

さらに、「赤穂神社」に関連するものとしては、明治時代に作られたと思われる備前焼の宮獅子(狛犬)の破片が見つかりました。赤穂市内の現存する神社では4対確認されていますが、発掘調査で出土したのは初めてのことです。



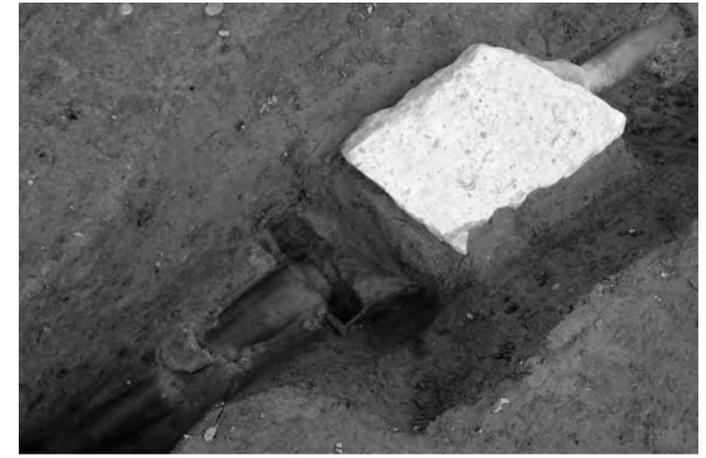
△大量に捨てられていた「赤穂神社」の瓦  
明治時代や昭和24年の工事のもの



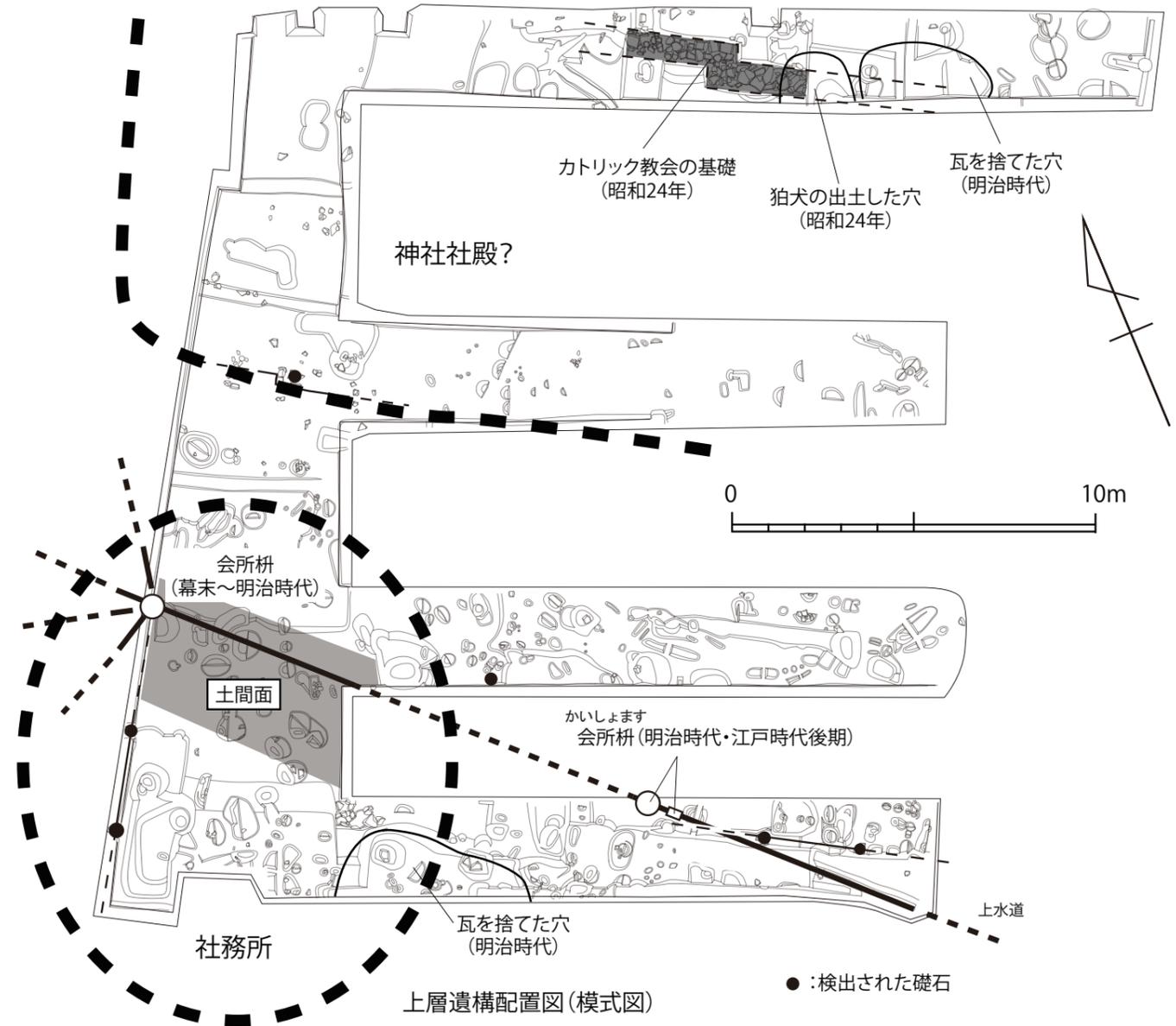
△瓦と同じように捨てられていた備前焼宮獅子の破片(狛犬)



△上水道の会所枡(幕末～明治時代)  
木蓋が残り、内部は埋まらず空間になっていました



△上水道の会所枡(江戸時代後期)  
木蓋の上には大きな石がのせられていました



上層遺構配置図(模式図)

● : 検出された礎石

下層は江戸時代初めから江戸時代中期までの地面で、侍屋敷の跡がみつかりました。具体的には、<sup>はしらあな</sup>柱穴、<sup>いしがき</sup>礎石、<sup>ごみ</sup>ごみを捨てた穴などがみつかりました。みつかった侍屋敷の跡は、江戸時代初めのものと、江戸時代前期から中期のものに分かれます。

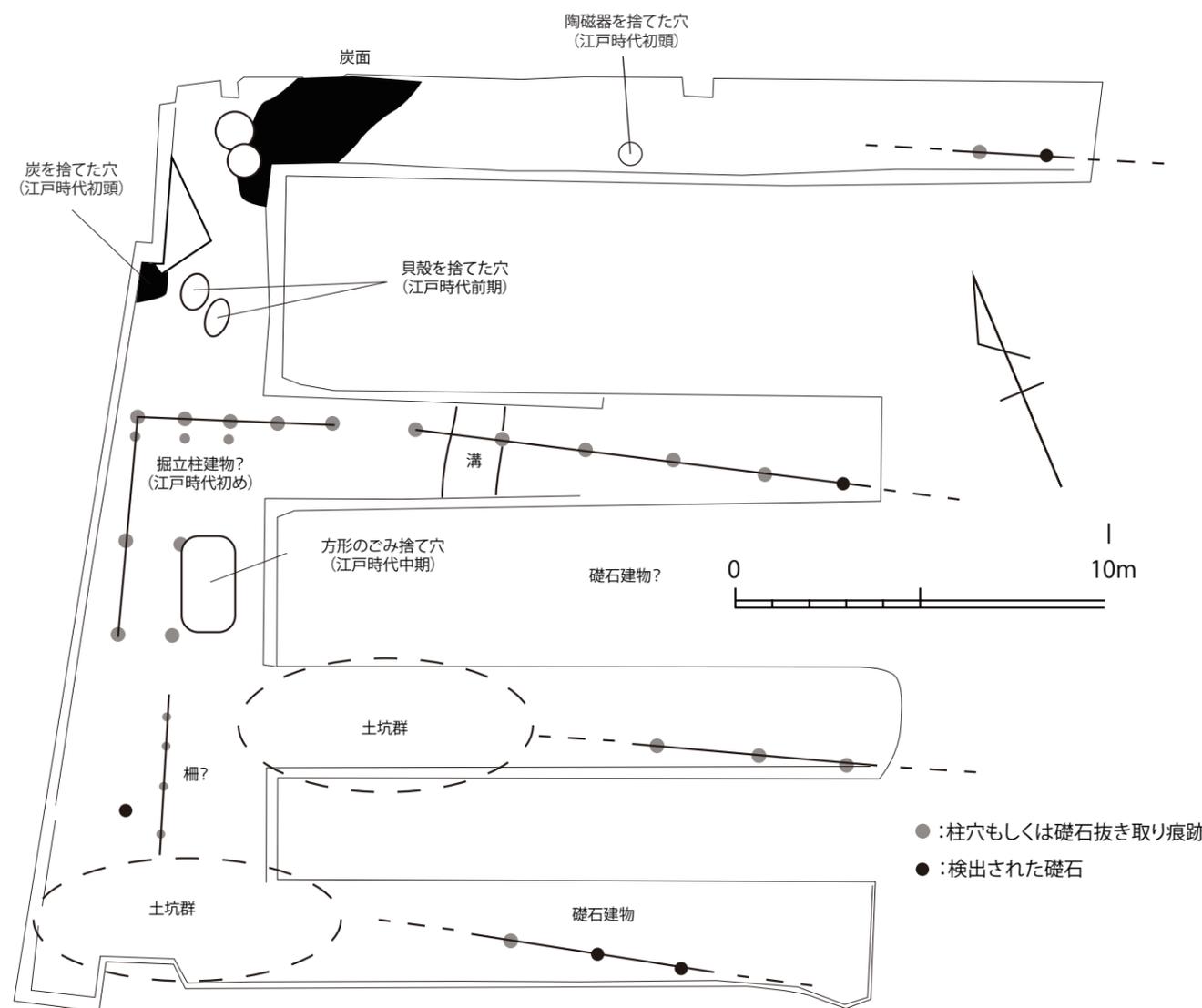
調査地の西側でみつかった方形の穴は江戸時代中期のもので、中には赤く焼けた壁土や炭、瓦、陶磁器、動物の骨などが大量に捨てられていました。ただ、南側には石材を組んで石垣のよう<sup>いしがき</sup>にした部分があり、本来は石組みの護岸をもった施設であった可能性があります。出土した陶磁器の中には大皿<sup>おおざら</sup>が多くみられることや、獣脚<sup>じゅうきやく</sup>のついた火舎<sup>かしゃ</sup>（獣の飾り<sup>けもの</sup>がついた大型の火鉢<sup>かざ</sup>）<sup>ひばち</sup>が出土するなど、町人の住む町屋ではあまり出土しない遺物も出土しています。北側には貝殻を大量に捨てた穴も見つかっており、当時の生活の様子<sup>しやう</sup>がしのべられます。また、瓦が出土したことから、江戸時代中期の侍屋敷には瓦が葺かれていたことがわかります。

調査区の北西部でも、貝殻や陶磁器の捨てられた穴がみつかり、出土した陶磁器から江戸時代前期のもの<sup>もの</sup>とわかりました。以上のことから、江戸時代前期から中期には、調査地の西側から北西側には建物はなく、裏庭<sup>うらにわ</sup>のような建物の無い空間が広がっていたようです。詳しい時期はわかりませんが、調査区の東側では礎石を持った一辺が10m以上の比較的大きな建物があり、これがこの時期の侍屋敷の建物となる可能性があります。

調査区の西側には柱穴が多数見つかりました。柱穴は直径30cmほどと小さいものですが、形状や配置<sup>ほったてばしら</sup>から掘立柱の建物になる可能性が高いといえます。調査範囲が限られているため、正確な大きさは不明ですが、一辺5m以上の建物となるようです。調査区内では同じ時代の瓦は見つかりませんが、江戸時代初めの建物は瓦葺<sup>かわらぶき</sup>ではなかったと考えられます。この建物の北側には陶磁器や動物の骨、大量の炭が捨てられた穴が、南側には柵<sup>さく</sup>や塀<sup>へい</sup>になるとされる柱穴もみつかり、江戸時代初めの侍屋敷に伴う生活の痕跡が見つかりました。



△方形のごみ捨て穴は大量の石材や瓦、陶磁器が捨ててありました（江戸時代中期）



下層遺構配置図(模式図)

#### 4 まとめ

今回の発掘調査の成果をまとめると、次の2点となります。

##### ①江戸時代後期から明治時代の「天神宮」の跡が見つかった

江戸時代の神社跡の発掘調査事例はとても珍しく、また社務所と思われる建物がみつかったのも赤穂市内でははじめてのことです。このように、神社の社殿や社務所の配置などが明らかになったことで、これまで文献や絵図でしかイメージできなかった「天神宮」の姿がより鮮明に復元できます。

②江戸時代初頭の侍屋敷の跡がみつかった

赤穂城下町跡のこれまでの発掘調査では、町人の住む町屋地ではたくさんの建物跡がみつっていますが、侍屋敷地では遺跡の残りが悪く、穴や溝などの痕跡もほとんどみつかりません。特に、江戸時代初めと思われる侍屋敷の建物跡がみつかったのは、赤穂城下町跡では初めてのことで

す。今回の発掘調査によって建物や敷地内の様子が明らかになったことで、当時の侍屋敷がどのようなものであったか、またその移り変わりが分かってきました。江戸時代初頭の侍屋敷は瓦葺ではなく、掘立柱建物という簡素な建物が敷地内に建っていたことがわかります。江戸時代中期ごろには侍屋敷に瓦が葺かれるようになり、比較的大型の建物が建てられるようになったようです。ここまで侍屋敷の変遷を明らかにできた例は赤穂城下町跡では初めてのことで

す。このように、今回の調査成果は、赤穂城下町の侍屋敷や武士の生活の様子を明らかにできる重要な成果となったといえます。

5 赤穂カトリック教会の建物の調査

赤穂カトリック教会は、以前から江戸時代の神社の建物を使用しているとされ、江戸時代の神社建築が残っている可能性がありました。そこで、赤穂市教育委員会では教会の解体前に建物の調査も行いました。

調査では、赤穂カトリック教会の建物は明治時代の建築でしたが、一部、江戸時代の建材を再利用していることが判明しました。また、壁の下地に絵馬を再利用しているなど、「赤穂神社」の痕跡を多く見つけられました。

特に、屋根にのせられている瓦には、「安政五年」(1858年)の年号の入った鬼瓦が見つかりました。この鬼瓦は森家の家紋である「鶴丸文」をあしらっており、森家にゆかりの深い場所に使用されていたと考えられます。「赤穂神社」の前身は赤穂城内にあった「三霊祠」(祭神として森家の祖先を祀った祠)であったことなどから、赤穂カトリック教会には、江戸時代に存在した「三霊祠」の瓦を使用している可能性が高いことがわかりました。また、「天神宮」の神紋である「梅鉢文」をあしらった瓦も使用されており、江戸時代後期の「天神宮」の瓦も再利用されていることが判明しました。

この建物の調査によって、赤穂カトリック教会の建物の由来やその歴史がより一層明らかとなりました。

今回の発掘調査の成果と合わせ、赤穂市の江戸時代の歴史を語るうえで貴重な成果が得られたといえます。

関連年表

享徳年中 (1452~1455年)	岡豊前守が加里屋に砦を築く。(加里屋古城)
文明・長享年中 (1469~1489年)	塩屋高山山麓から加里屋上町に集落が移住。
天文元年 (1532年) 以前	大蓮寺創建。
天正2年 (1574年)	万福寺が那波(相生市)から加里屋へ移転。
慶長5年 (1600年)	池田長政、赤穂を治める。(以後、1645年まで池田家が赤穂を治める。)
慶長5~7年 (1600~1603年)	現在の赤穂城の位置に「搔上城」が築かれる。
元和2年 (1616年)	赤穂上水道完成。
元和7年 (1621年)	加里屋大火。加里屋全焼。大火後、初めて町割が行われる。
正保2年 (1645年)	浅野長直が常陸国笠間から赤穂へ入封。赤穂藩主となる。(以後、1702年まで浅野家が赤穂を治める。)
正保年間(1645~1648年)	赤穂城の塩屋門西に、「天神宮(天神社)」が建立される。
寛文元年 (1661年)	赤穂城完成。
元禄14年 (1701年)	浅野長矩、刃傷事件により切腹。
宝永3年 (1706年)	森長直、赤穂藩主となる。(以後、1871年まで森家が赤穂を治める。)
元文元年 (1736年)	現在地に「天神宮」が移転される(『赤穂郡志』説)。
明和3年(1767)	森忠洪が赤穂城二之丸に「三霊祠」を建立する
安政5年(1858)	赤穂カトリック教会屋根にのせられていた鬼瓦に刻まれた年号。
明治4年 (1871年)	廃藩置県。
明治42年(1909年)	「天満宮」が「赤穂神社」に合祀され、現在地は「赤穂神社」となる。
昭和24年(1949年)	「赤穂神社」が「大石神社」に合祀され、現在地の神社土地建物はカトリック教会に売却。赤穂カトリック教会完成。
平成25年 (2013年)	赤穂カトリック教会解体。
平成26年 (2014年)	発掘調査実施。

